

日本人中年男性の孤立性拡張期高血圧患者において waist-to-height ratio は慢性腎臓病新規発症を予測する

徳武 大輔

鹿児島大学大学院医歯学総合研究科 心臓血管・高血圧内科学

【目的】 肥満は慢性腎臓病 (CKD) 発症と関連することが知られているが、若年から中年に多い孤立性拡張期高血圧においては明らかではない。

今回我々は日本人中年成人の孤立性拡張期高血圧患者における waist-to-height ratio (WHtR) と CKD 新規発症との関連性を性差を含めて分析した。

【方法】 JA 鹿児島厚生連病院健康管理センターで2007年から2015年の間に受診歴及び5年後の再診歴を持つ30～59歳の健康診断受診者のうち、初回受診時のCKD患者、降圧薬・糖尿病治療薬・脂質異常症治療薬の使用者、心房細動患者及び欠損値を有する症例を除いた、30059名を対象とした。収縮期血圧 (SBP) の閾値を140mmHg、拡張期血圧 (DBP) の閾値を90mmHgと設定し、正常血圧・孤立性拡張期高血圧・収縮期拡張期高血圧・孤立性収縮期高血圧に分類、さらに男女に分けて層別化し WHtR と5年後のCKD新規発症との関連をロジスティック回帰分析にて検討した。共変量には、年齢・SBP・DBP・総コレステロール値・空腹時血糖・尿酸・eGFR・喫煙習慣・飲酒習慣・運動習慣の有無を用いた。

【成績】 5年後のCKD発生における WHtR 1 SD変化あたりの調整済みオッズ比 (OR) 及び95%信頼区間はIDHの男性においてのみOR=1.56, 95%CI [1.17-2.08] と有意に上昇を認めた。

【結論】 WHtRは男性IDH患者の将来のCKD新規発症予測において優れており、男性IDH患者ではより肥満の予防及び改善に着目した生活指導や治療が必要である。